



公開セミナー記録

『セミナー断章』

2011年12月

講義：藤田博史（精神分析医）

セミナー断章 2011年12月10日講義より

原点に還る

藤田 人間は何か困難に直面すると、よく昔から言われますが、「原点に還れ」と言う。「原点に還れ」。では自分の原点って何だろう、ということなのですね。原点に還ってみて、そこから考え直してみるというのは実は非常に重要なことなのです。

特に精神分析は、学問でもあり治療技法でもあるのですが――学問としての精神分析はあえて「精神分析学」とか言いますが――その精神分析というものは、19世紀の終わり頃にフロイトが構築をはじめた方法論です。人の心の仕組みを明らかにする、詳らかにする方法論なのですが、ほとんどフロイト一代で作上げられた方法です。そしてその周りにいろいろな人たちがいて、国際精神分析協会ができて、そこにいろいろな人たちがたしかに集いました。それがフロイトの弟子たちと言われる人たちですが、そしてそのフロイトの弟子たちも死んで、そのフロイトの弟子たちに学んだ人たちも今やもうかなり歳をとっている。平安時代に「三世一身法」というものがありました。三代に渡っているのです。既に。フロイトから考えると、既に世代的には三代、あるいは四代。だいたい人間の思想って、三代目が減ぼす、あるいは四代目が減ぼす。伝統の造り酒屋とかもそうですね（笑）、最近では大日本製紙とか（笑）、潰してしまうんです。

つまりその筋書き通りに、精神分析は見かけ上、その効力を持たないかのような状況に、今、置かれていると思われるのです。

ジャック・ラカンが出てきて、現代思想との絡みで、少し精神分析が延命された。延命されたんですよ、癌の治療と同じように延命された。

この先には何があるかという、延命というのは、死ぬ運命にあるわけですが、延命ではなくて治癒、つまり精神分析が今置かれているこの状況から抜け出して、自らが治癒し得るかということなのです。

治癒するというのはどういうことかということ、かつての、たとえば20世紀の半ばぐらいに盛んに行われた各学問との関わり。精神分析自身が人間の心の一番根本とか根源の仕組みとか構造について明らかにする学問だとしたら、その上に構築されているものに対して、精神分析はコミットできる。つまり関わっていくことが可能なのです。

構築物でいうとお城、姫路城とかいろいろありますが、お城というのは石垣の上に載っていますよね。石垣というのは、雨が吹いても嵐が来ても火事になっても残るものですが、その上に木造のお城が構築されています。その木造のお城に相当するものが、おそらく諸学問だと思うのです。精神分析というのは、そういう諸学問を根底で保証するもの、あるいは保証しないもの、あるいはそういう諸学問に対して影響を与え続けるもの、というのが本来の精神分析のポジションなのですが、精神分析にあまり縁のない人たちは、学校の時間割のように、たとえば大学の授業が一時間目が地理、二番目が文学、三番目が精神分析となっていたら、それぞれ独立した学問であるという風な感じに、つまり並列されているものだ、という風にとらえてしまいがちなのです。そこに心理学などという別科目が入ってくる訳だから、余計にそうなのです。つまり学問がカタログ化しているわけです。

上の写真は、南仏・ニースの城跡公園にある石畳。

そこにはフランス語でHEUREUX QUI COMME ULYSSESSE FAIT UN BON VOYAGE（幸いなるかな、ユリシーズのようによき旅をしたものは）と書かれている。

今の若者に共通する思考様式の特徴を挙げるとすれば、カタログ化ということです。様々な知識がカタログとしてすぐに手に入るのですね。だから、知っているんですよ、一応。ラカンという名前も知っているし、フロイトも知っているし、ひと通り知っているのだけれども、いわゆるカタログとして知っている。

車や家電買う時もカタログを見ますよね。カタログで知っている。だから実際のオーナーよりすごく詳しいということがしばしば起こります。

「藤田先生、その車、確かその右側のスイッチのところを左にひねると、ヨーロッパで使うパーキング用の特殊なランプになっているんですよ」と言われても、「ええ、何のこと？」となる。つまりカタログを読んでいる人の方が詳しくかったりする。ここが問題点なのです。

ところが、車は運転して乗ってみてはじめて車なのです。

知識の量だけが膨大になっていくと、その人も錯覚を起こして、さもそのことを体験として知っているかのようにになってしまう。体験していないのに体験しているかのようにになってしまう。全体を把握していないのに全体を把握した気になってしまう。そういう水準で知が蓄積されているのです。

たとえば東浩紀氏が書いたものがわたしの心に響いてこないのは、それがカタログ的な知から構成されているように見えるからです。基本にあるのはジャック・デリダや量子力学の名を借りた思想カタログもしくは思想フィクションです。実際に砂漠のなかを歩いたか、ジャングルのなかを歩いたか、実際に異国の地で何年も過ごしたか、というような、生身の体験や根源的な危機感が感じられない。自らは安全な場所に身を置いて、頭の中で順列組み合わせで知識を再構成している。厳しい言い方をすれば、人も羨むエリート大学卒業生が書齋で捏造した小賢しいフィクションです。迷える子羊たちはその人の言うことについてさえ行けば何とかかなると思ってしまう。

フィクション・身体・情動

最近、ツイッターなどのネット上でのリアルタイムな情報交換が起爆剤になって、ジャスミン革命をはじめとする民衆の運動が起きていますが、どうしてああいう運動が起こるのかといえば、デバイスの普及も含めて不完全な形でやり取りされる情報は実際の運動に結びつきやすいということが挙げられます。つまりインターネット上で全ての情報が与えられるわけではないので、インターネットの次は行動というわけなのです。だからインターネットが行動する動機になっているのですけれど、いわゆる先進諸国、たとえば日本とかですと、その次の段階もインターネットで行動できてしまうので、実際に部屋から出なくても、全部やった気になれてしまう。引き籠って、最近では、ニコニコ動画生中継みたいな、yostreamみたいな、自宅から全世界に発信、みたいなことになってしまう。

だからますます人間のこの社会のフィクションたるフィクション性が際立って来ているわけです。もともと人間が作ったものはフィクションですけれど、そういうフィクション性が際立っている。

そういうフィクションの中でわれわれが生きているということは、フィクションがフィクションであることを常に意識しておくということに尽きると思うのです。フィクションを現実と混同してしまうと、さまざまな不都合が起こってくる。

精神分析に関して言うと、精神分析ももちろん人間が考え出したものですから、一つの立派なフィクションですが、ただ精神分析がフィクションであるに留まらないのは、ジャスミン革命が起こったように、この精神分析の理論をもとに、人を本当に変えることができるということです。

あるいはもっと医学的な話をすると「病んでいる人を救うことができる」ということ「病気を治すことができる」ということ。つまり「フィクションがフィクションの外へ出て行く」ということなのです。

フィクションというのは閉じられた一つの空間なのです。だからフィクションのなかだけで完結するのではなくて、フィクションが外へ出て行く。ではどこにでていくのかというと、フィクションが人間の感情だとか情動だとかに作用する。

もう一つはフィクションが物理世界を変える。人間の身体も含めて。

たとえばロケットを打ち上げて月に着陸したというのは、これは物理世界そのものに変化を起こさせているわけですね。たとえば原発というのがそうですね。事故が起こらなければすべてフィクションで済んでいたものを、実際に壊れてしまったら、これはもうフィクションの外へ出てしまっているわけです。つまり物理世界を変えてしまっているわけです。こういうフィクションが現実のものになるということに対して、日本人はすごく鈍感なのです。つまり日本的なものを形作っているのは基本的にフィクションなのです。

だから精神分析がフィクションのままだと、おそらく延命装置の状態のまま精神分析は消滅してゆくのだらうけれども、精神分析がフィクションでないのは、実際の身体や情動的な感情世界にコミットするからなのです。

それはどんな条件においてか。それがラカン派が昔から描いている「ポロメオの三つの輪」（図1）みたいな形でコミットするわけです。

それぞれ別個だと思っていのですが、われわれの価値とか、われわれの作り出した文化とか、全ての学問を含めて、あるいはわれわれの仕事とか価値観とか言語とか、それは全部この中に収まってしまう。

問題はわれわれはロボットではないわけだから、生身の人間だということです。生身の人間だということは、こういう物理的な身体を持っている。こういう物理的な身体は物理的であるが故に、いつか滅びるわけでしょう。そしてその物理的な身体を持っていて、しかもわれわれは脳を持っていて、その脳は複雑な情報処理ができると同時に、身体から供給されるような種を保存させるようなエネルギー———リビドーとかそういう表現をするわけですが———そういうもので支えられているということです。

だから、ことの起こりとしては、進化の過程としては、こういう形で来たのでしょうけれども、いまやフィクションたる精神分析が実際に病いを治す、こういう状況ですね。

こういうのを化学用語で「左旋性」と言います。左に回るから。だからこの輪っかの重なり方には二通りあるわけです。つまり、これがこうなって、これがこうなって、これが円盤だとしたら、一番上にあるのがで、その下に R が来て、S が来る。

逆もあるわけです、「右旋性」(図2)。lévogyre と dextrogyre。

わたしの知っている限りでは、この左旋性と右旋性の違いに言及しているのは、アソシアシオン・フロイディエンヌのシャルル・メルマン Charles Melman です。それぞれの関係性がローテートしているのだけれども、そのローテートの回転の仕方によって生じるものが違うのです。関係の仕方が違う。出て来るものが違う。出てくるものとは、端的に言えば「症状」です。

厳密に言うと、フロイトが指摘した三つの症候、inhibition, symptôme, angoisse、これは「制止、症状、不安」と訳されていますが、実はこの制止とか症状とか不安というのは、この三つのレジスター（境域）との関係のなかに生まれてくる。この重なり部分に symptôme (症状) が来る。そしてこここのところに inhibition (制止)、ここに angoisse (不安) が来る。(図3)

たとえばわれわれの象徴的なフィクション、そのフィクション自体が、フィクション fiction (S)、身体 corps (R)、情動 émotion (I) となる。そうするとフィクションが身体に与える影響というのは、たとえばヒステリーの患者さんが、目が突然見えなくなったりとか、発作を起こしたりとか、身体の水準で症状が出てくる。これは象徴的なフィクションが症候として身体に現われてくる。だからこうなっていると、この部分に症候、重なり部分の部分が来る。このところに inhibition (制止)、そしてここに angoisse (不安) が来る。

だから真ん中の部分は要するに、symptôme、(症状) もあるし、inhibition (制止) もあるし、angoisse (不安) もあるわけです。つまり inhibition (制止) そこに行きたくても行けない、そしてわれわれが作り出した延長上であって、とても不安を生み出すもの、それが対象 a (objet petit a) です。(図4)

だから通常われわれの心的構造というのは、こういう左旋性に働いているのです。ところがこの右旋性、逆に回転するということ、つまりフィクションが情動に影響を与えたらどうなるのか。情動が身体に影響を与えたらどうなるのか。身体がフィクションに影響を与えたらどうなるのか。これが何かということです。これはヴァーサスというか裏というか、裏という言葉を使えば、裏不安、裏症状、裏制止みたいなね。実は人間が出している症状はこのなかに集約されて来るのです。だから制止、症状、不安をフロイトが取り出した理由というのは非常に根拠があるものなのです。

それで一般の学問と言われている、人間が作り出しているものはこの S (フィクション) のなかだけで推移しているものなので、それは、あらゆる学問がそうなのです。ところがあらゆる学問というものは、そこには情動も含まれているし、身体も含まれているわけです。それらを一緒にたにしていると、何がなんだかわからなくなってくるのと、いつまでたってもクリアに出来ない。

この文学作品は「症状」として成り立っているのか、あるいはこの作者の「不安」が盛り込まれているのか、あるいはこのなかにどうしても書けないもの、言っはいけないもの、「制止」されているものがあるのではないかと、そういうレベルです。

精神分析と量子力学

それで、この長年にわたってやってきた量子論理、あるいは多世界論理、様相論理、そういう現代の論理学とか量子力学の考え方からヒントを得て、精神分析そのものを脱構築できないかというのがこのセミナーの目論見なのです、わたしの考え方は。ここまでやってきたけれども、ゼミに出ている人たちには言っているけれども、得るものは少なからずあったけれど、未だ最終的に得るものが見つからないのです。

専門家は量子力学については詳しい。ただ自分が何故、量子力学をやっているかという、それに向かわせている欲望とか、あるいは量子力学の発想のなかに含まれる欲望的な部分とかについては無知であり続けているわけで、量子力学を離れると常識的な日常のなかへ戻ってゆける。精神分析をやっているとなかなか素直に常識のなかには戻ってゆけなくなる(笑)。

だから期待したいのは、量子力学のすぐれた専門家が、精神分析を同時に研究してくれることなのです。おそらく。そうすれば量子力学の専門家から見た精神分析の欠点がたくさん見えることでしょう。フロイトが生み出したままの精神分析に対して、量子物理学者に手を加えてもらいたいです。

だから接点としては、人間の心も多世界、量子力学も多世界の論理であり、様相論理にもやはり多世界論がある、

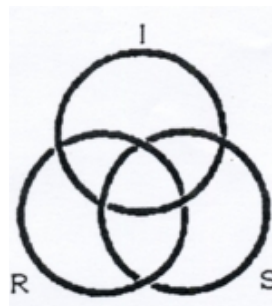


図1

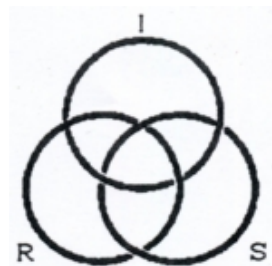


図2 右旋性のポロメオの輪

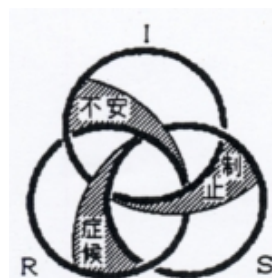


図3

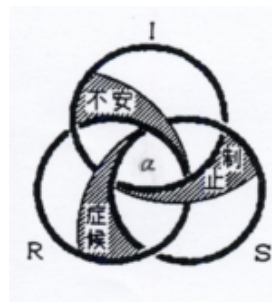


図4

つまり「多世界」という考え方を共通で持っているわけです、精神分析も物理学も様相論理も。だからこの「多世界性」を解明することが、あるいは多世界性の多世界性たる所以を、きちんとサイエンティフィックに、構造的に把握することが、精神分析を蘇生させて、新しい治療論として、もう一度、21世紀に甦らせることができると考えるのです。

そうすると実は「多世界」こそがわれわれが解明すべきことであることが見えてきます。わたしたちが住んでいる目眩く多様な状況は、実はこの多世界が具現しているように見えます。たとえば多民族、多国籍。すべてはそういう多様性で構成されており、だからそういう多様性のもとになっている心的な構造自体の解明が必要になってくる。

たとえば古典的な精神医学だと、「正常」という状態があって、その正常という状態がある別の状態に変質する、変化してしまう、それが異常なんだ、と考えるわけです。それもある意味きわめて常識的ですよ。

重症の精神病に対して、今の精神科医が半ば諦念、あきらめの気持ちを持っているのは、「変質した」という発想に基づいているからなのです。つまり腐ってしまったリンゴをまたフレッシュなリンゴには戻せないよ、という発想なのです。

ところが多世界論理は、誰かがこの腐ったリンゴとすり替えたのだ、またそこにフレッシュなリンゴを見つけ出して、置き換えればよいのだ、ということなのです。そこに構造論的な精神分析の、基本的な考え方があるのです。つまり健全な部分というのは病者でも残っている、あるいは隠れている、潜んでいる、という考え方です。だから治療というのは、その健全な部分を出してきて、また異常な部分をきちんと本来いたところへ戻してあげることなのです。「あなたの出番ではないんだよ」「あなたの出番なのは夜寝ている時だけですよ」とかそういう形です。

ところが多重人格といって、起きている時に様々な人格が出てくる病気がある。そういうことが、今の考え方の正しさを裏付けている一つの証拠になります。あとは、夢のなかで自分たちは別の人格になる、ということがあります。あたかも自我は連続しているかのように見えるけれども、夢のなかの自分は結構大胆なことをしてしまったとか、現実にはないものを「ある」と認定してしまったりとか。だから現実の自分とは、自我とは、違うわけです。

するとどうも、多重だという風に設定した方が、ものごとがすんなり説明できる。これがサイエンスの考え方です。

だから仮説として、つまりヒポテーゼとして、「人間の心的世界は多重である」という風に前提して、精神分析的な理論を構築した方が自然なのです。そこで当然「多世界論理」とコミットしてくるわけです。

もう何年前かにデイヴィッド・ルイスという人の話をしましたけれども、これは様相論理学者です。『On the Plurality of Worlds 世界の複数性について』という本を書いています。このデイヴィッド・ルイスによれば、世界は多世界で、その多世界のなかを共通して旅する人がいる、のです。それを「トランスワールド・アイデンティティ」という。世界を横断して横切って、一つのアイデンティティを保っている人。そのトランスワールド・アイデンティティについて、やはり論理学者の考え方はさまざまあって、まったく同一でなければ駄目だという人もいますし、いや、そこそこ似ていればいいのだ、という人もいます。

で、人間そのものが外出する時、ラフな格好で外出する場合もあるし、フォーマルな服を来て外出するときもあるし、さまざまな場合があるし、怒りながら街を歩いているときもあれば、にこにこしながら歩いているときもある。だから人間というのは実は、もともと「それっぽい」ものであって、「それ」って確定することは実はできないのに、あたかも固有名を与えて、たとえば榊山裕子という、それに当てはまる人格が一つであるかのように、固定されているかのように、決めつけられているでしょう。これってやはり一つの洗脳だと思うのですが、実は、トイレに座っているときの榊山裕子と、電車に乗っているときの榊山裕子と、眠っているときでは、全部違うわけです。

だからトランスワールド・アイデンティティに関しては、わたしはデイヴィッド・ルイスの説を支持します。リジッドでなければいけないという風な立場に立っている人の例としては、ソール・クリプキがいます。クリプキは結構厳密にトランスワールド・アイデンティティを規定します。

聴講者 一つか一つでないか、どっちにも真実があるように聴こえてしまう。

藤田 いや、あの、一つは一つなのだけれども、それっぽかったらよい、という考え方なのです。

聴講者 ああ、なるほど、なるほど。

藤田 つまり前に言った観測問題で、要するに、きっちり観測するときと、なんとなくボンヤリ観測するときとありますよね。だからボンヤリ程度でいいのだ、ということです。それを量子力学で、電子の位置を設定しようとしても、電子の運動エネルギーと位置エネルギーを同時に決めることができないのと同じで、実はボンヤリとか、アバウトということこそが、サイエンティフィックな宇宙記述には似合っている。だから、サイエンスはきちんとしたものである、という人から言わせると、なんとなくこのボンヤリが許せないでしょうけれど、だいたいこの先のサイエンスというのは、このボンヤリの部分をきちんと扱えるのかということが、一つの課題です。

たとえば量子コンピュータを開発していくうえで、当然、量子もつれの問題が出てくるわけですが、量子もつれというのは、1か0かという二者択一ではなくて、1と0の間のどこか、みたいなそういう考え方です。

どのくらいの割合なのか、たとえば、今、AさんとBさんをサイエンティフィックな方法で合成了ました、Aさんの割合が1パーセントで、Bさんの割合が99パーセントの可能性もあるし、逆にAさんが99で、Bさんが1の場合もあるし、フィフティフィフティの場合もある。

実は、量子もつれの状態というのが、人間の人格というもののシミュレーションになっているのではないかと

うことなのです。つまり、量子力学についてどうして取り上げてきたかということ、量子力学というのは、観測問題があるということ、量子もつれの説明の問題がある、ということなのです。

あとは、粒子でもない、波動でもない、あるいは粒子でもある、波動でもある、というような、一義的に物事が定まらない世界なのだ、ということなのです。

裏を返せば、われわれの欲望というのは、何か一義的にものを決めようとする欲望があるわけです。一義的にものを決めようとする。実際は学問が進んでくると、一義的に決まらない、ということが重要で、位置エネルギーを決めると運動エネルギーが定まらない、運動エネルギーを決めると位置エネルギーが定まらない、というのが実際のところなのです。つまり、宇宙は人間ごときには捉えられないような仕組みになっている、ということなのです。

では人間が逆手をとって立ち向かうとしたら、多重性をその多重性のまま、どのように記述できるのか、あるいは、多重性をどのように取り扱うことができるのか、という問題なのです。

だからかけ離れているように見えるけれども、実は、量子コンピュータの実用化と、精神病を治す技法の開発はパラレル、似たところがあるのです。

聴講者 通底しているところがあるのでしょうかね。

藤田 多世界性をどう処理するか、という問題なのです。今のノイマン型のコンピュータはドミノ崩しのように、絶対一つの順番に、順番に全部一個ずつ、0か1かに分けてやっていかなければ駄目な世界で、これは自然界を模倣しているとは到底言えないのです。

聴講者 かつてファジーというのが流行った時期が20年ぐらい前にあって、若い頃には期待しましたがけれども、あれはあれでしかなかった、というか。

藤田 あのファジーをプログラミングしているのも0か1かなので。

聴講者 結局あれは騙しでしかなかった。

藤田 ファジーとは違うのですね、多重性というのは。

=====

精神分析医 藤田博史による
公開セミナーの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
janvier 2012
『セミナー通信』Webマガジン版
2012年1月発行 「セミナー通信 復刊第1号 2012年1月号」
発行 ユーロクリニック文化部 EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子
Tel:042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

=====